やまとものがたり

中

ホ 2
627
2

門 加賀
號 627
卷 2

吉野隆平藏書

山口栞中巻

四段のはたらき

四段乃はたらき語とも才四音よりちゝすせと活く詞
ことゝはたらきかくさたぬにせと活くこともはたらくこともおもはる
はるゝゝれらりるれと活くしくふ詞を少しうやまふうること
いへるゝゝ古事記高津宮段なる御哥よりしくゝなる
伊幣勢許曽うちるゝゝとあるゝとあれおらんゝ尚考ふへし

みつ　みつる

滿
みつといふ詞も四段に活くゝ下二段に活くゝ二りゝ志うほゝ人お原
く此二のいつまへもつるぬ中二段の活きのやうに思ひをるゝ誤なり

ある書に落ふ朽つる閉はるれ類とひろけらき言としてみつ
るをみちらといふた俚言なるらをいへるなもくたちこうぬ故
也万葉集十八巻にたまくきき美豆々つきてうよけん千載神祇に
君をいのる願をそうにみてしさまへにあいうつちれ神なるた神う
つ保祭使に祈うひみてあへとあるろれ内にいのりに云源氏東屋
古五十六 人のねうひをみてむけんにそこうれられみてんみつ
るみつまと活きてみくれふ意也されたうれおのつうらたうは意か
ふをはみてんみちみつみてとりふなるとた異なう家隆に乃う
ゑみつるたのもれさなへ水みちて濁なきらのうけそええけると
よに給ひりんも初句なるみつるは使然の詞中の句あるみちてた自

然の詞にて意異也たゝみちてとあるた四段活にて自然の詞古今集にみつるはのか
ぬるいそのくちなれやとけるれでと文字已然言となれるかくハちまくにおほく引る
詞にもをみて四段のけさくきのかされらくあるるれゝ今は下二段のけさらきのうれ
例のみちほく　た出し置あり　一首のうちにてうくに二うくにけるらく言なるとくいひせ
明にあられくるをやすへてみつとみつるとた自然と使然にのとう
ちけるるすかれも出雲風土記の鹽満時をたはみつるときとくむ
あとたとろし　ついてくいたん八ちまくに此詞を多行四段活のつうに出せる所に
引るくほみでもの哥は万葉の也古今れ也とせるたく暗記の矣に
そなうん　なはいたく水みちてといへるみちたそくこちてそくん或た
たんくこちてかとの例にて自然の詞うたゝつるといへるうくたた
てんくてく育てん育ていなとへる類にてそゝ使然の言なるをそ

又

みつといふへきをみつるといひみてともを〳〵文字のこゝぬをうれいつも
ともといひてゝろ　いつもまたゝゝゝゝくれとみてれ
ちきゝるものあり　といふへきをもみつれともといふこと近きゝゝを
みれといゝ見なけつうふなるいとおほゝて心つきおうおほゆる
事也やゝふるくもおもへゝゝつれをやうてゝゝ月れいさよふ空
や人迚中とゝふめゝゝゝゝけゝ哄才二句よゝろし　かゝに　ついてゝいふ
三句も言のはゝゝきゝ海ゝゝ〳〵きこゝゝあひうゝ〳〵　万葉七六こゝりくれけつせの
山ゝてゝる月を盈昃すゝを人のつねおき哄盈昃ゝて右ゝ出せるうゝこの才二才三両
句ともゝゝろしうゝぬゝとゝ　ゝへしゝも〳〵れゝゝのこゝきをゝゝ〳〵とせは哄盈
昃もミテカキ　とよまてゝゝゝおもゝこの万葉歌さはよみゝゝきゝゝゝ〳〵ゝゝ

ゝきつ

古今ゝ落ゝぬきつたゝのみおうみゝ〳〵つゝゝとよあはゝきつ。
多行四段のはゝゝゝきなゝこゝおのつゝゝ明あゝにこれをゝ天つ。

風たきし。浪なゝいふつもゝ〳〵と同〳〵事れやうゝおゝふゝ誤
なゝまゝて血の涙おちてそゝきつゝゝゝゝれゝそのゝす
ひゝ〳〵たれゝいよゝくきうふゝゝあきこゝなゝをゝるゝみゝ
こゝたきゝゝゝいゝんゝゝ〳〵てたきつ。ゝゝ川ゝいひゝけてむに
ゝむたゝゝ下ゝつゝきゝゝゝゝゝとけゝゝいみ〳〵きひゝ注釈なゝ
万葉一十九多藝津。河内ゝ舟出せにゝも又九十三落多藝知。流水乃又
十一十春雨零而瀧津。湍音乎同四一瀬呼速見落當知足白浪爾又十
一十四いちもゝ瀧千逝水之をゝきゝゝゝ尚おほゝ〳〵ゝ又やゝ
後のゝゝゝも落たきつやゝそ氏川のれゝゝゝゝゝ用言なゝこゝ
誰ゝみきゝゝへゝゝきゝゝゝゝゝて考ゝゝゝきつ。白浪なゝゝゝゝゝも用

言なりとみてよく聞まるおほ〳〵ちまとそう中ふたたきえ瀑
まてつたとほつ人天つ風なるものつと全く同き也と覚〳〵きゐ
きまえ　ひろ〳〵にやとふるくは伊勢御家集ニ音羽川せき入てお
とんたきつせニ人の心の見えもはる哉とあるかと是あり新続古今
十七一〳〵ふれ過ニあ〳〵しをみよ〳〵はく吉野のさくら岩たくくなりとちる
こまえたきのなりし〳〵ぬさくらつ〳〵誤れるあ〳〵ん

もみつ　もみ〳〵に

もみつえ八ちまニ小多行中二段活のつうニ出せるなくちやうニ活
く言なり然ニ猶考ふれハ同行四段ニも活くとうも万葉十ニとう
せこのちろ〳〵へ衣往觸者應染毛黄葉山可閉同巻ニあ〳〵引の山
さかうら黄変及いもニうちんにやうあひちゝんとうるこれ〳〵

皆仙覚本ニもみつ山黄葉もみつまくとうありさてえ坏同えもみ
んもみちもみつもみてと活くとう関えてうこれなきはむ山きは
むまてとうみ改むる説えようしうちうへしさうえ同集十四
ニこもち山わう〳〵へうその毛美都麻氏れ將寢我思汝狗もと和そもふあたこのと
うもふとも見えうれたなう同集八巻ニうやとの萩の下葉え秋
風も未吹者如此曽毛美照テル
もうつえ四段活なれえニこそちて又同十巻ニうりうねの寒きあ
〳〵れ露ちらしうんうれ山をもみ〳〵すものえ令黄物者とうけりこれを
少し改めて後撰秋ニ雁なきて寒く朝の露なうし立田の山ぬ
もみ〳〵んとのえとうるなとを考ふるこはもみ〳〵ちんもみ

いたもみさせとたゝらく言と聞まをさけゝくたそのた
の音もくたちつてと活く言なるうゝあるうある人ゝふ此論を是
きと似てあひとゝあるへし其故たはやはといふ詞あれゝもち
ととてもとたやんたいたやたえ。活く言ひうともいたきし
又うゝうんといふ詞あれとうゝうんうゝきうゝくうゝけといふ
詞もなゝうゝけうゝくゝるとはゝゝく言こそたひれいうるとん
をう答ふけと然なりさまたあゝやる詞を皆此例を心得へきと
ひうらぬこゝもとうゝたちとありちきとゝ今たはへて四段活とひる語
ともの才一音ゐさたはまらゝうさたはせと活く言うとうくおは
うふふとうゝたは例とつきていへゝめきなり　おはくゝうゝふふのことゝつきすも。
たは和。なんのなはとの音のこと

くはゝくゝの例ひうり活
語雑語に示にうやゝ　又ついくゝいたんむうゝやことなき其君のうれも
みちぬといふ詞をいうふそやと評めたまひうんた中くゝいふうし
もゝいやいうなる詞にて彼古今は哥を後拾の一本とてなうしの
抄にひうまゝふふつひにみとうれ松もえうれとあうえまきわう
ともおもうれぬにひうゝふやいや

又

はゝゝきさゑの論にそひうれとついくゝいたん万葉十五に百舟
のそはうつゝまれあきち山たうれの雨に毛義多比にけうといへる
多比た知を延たうのみなゝくゝこををもみさゝゝうとうとい
ふおなゝとくゝうふたをさをきわさかう上のたうれの雨にと

いへることの歌ハひとつくて一首の趣のきこえざるをたゞ弁へぬき
もの人々こゝかしこ処にてつゞりよを出んも自他の詞乃弁へなく謾
ある物なる事なるものぞ心せらるべし　そもそもかゝる誤も初学の人こそと
いふべきを今の世にては学者まで名
をとる人さへとかく誤るもいとくるしき心ぐるしきわざなりされば
つきても活語雑話にいへることともあり知るべき見るべし

ぬ　いぬ　なん

寝寐等の字にあたる詞のはたらくやうたゞひとつにかぎれば新撰字
鏡に眠眠也目合也祢夫留又伊奴　此伊奴といふ詞のはたらくもねぬ
ぬるぬれとはたらくこと明なり古哥にぬる中にぬれもや人のね
ぬる夜々などいへるは奈行下二段活也古事記に那佐牟を万葉集に奈
須良むいも叺奈世流君ともなどいへるは佐行四段の活あり　されば奈行と
佐行と二行差

別行なるに
となり　奈行にてハねぬと下二段にはたらく音を其くるれは第一音にうつり
ろもして奈といひ其奈を佐行の音としてさしすせとはたらくなれ
さへも加行にて下二段にけくと活く音は其行の第一音に転せずして加といひ
それを佐行の音としてさ志すせとはたらくなると同し例也　うけくるとけいふ詞
ありかくあげんとくらしゝうけうるゝせといふ詞あり　又也行にてえゑと下二段に活く音を其行の第
一音にてやといひそれを佐行の音としてさしすせと活かるゝ言　えぞえ
ひやひえ
むやんひ
やんの類　又羅行にて下二段にれるると活く音を第一音にらといひそれを
佐行にさしすせと活かるゝ言　もれもる
もらんもらんのるい　それそる
れとしへてあるべき
たへんいとおほかりこれらをはかぐげやむえらるれと活くなり
とぞいふなるはされば此寝をもかる書に寐はなぬねと活くと

さるめいへるを紛はしくてよろしからん

奈行るも四段の活きなるかと覺しき事

万葉集廿　この巻も東語にてそうそう通例にたいひくさき夏あれと　ちのうこまをや海野にたろし　刀里加爾
豆くまれよを山うゝ　也う遣んちれを下二段につねをくく兼を
古も四段にもはくらうせるにそうんちて北陸をクヌカともクニカと
も景行紀無仁紀なとにうけう此クは処あるへしさてクニとをくぬと
ゆ詞の連用言を処にそへるにそユク方をユキ方といふ類又クヌ
カをユク方といふ類なうくてやきをやくといひて連躰言とせ
るも加行四段活なるゆくくるをくぬといひて連躰言となれるを
奈行四段の活をもをこそさて此くぬといふこのころをとをまま

を処にるれさうひしうなりてこようこてまそそ定むるやうも意
はへ聞も古今序にをみなへしの一時をねるるもとけるるれる
も八ちまにる上十三にいはゆる四段のはくらさのその方四音をらうる
れををくらうせるにそちくぬ。ぬさげる立つをこでるなといふたく
ひとおもはるれをくねるのねもとくぶんくぶくぬくねと活
く言さるを一時をこうきうとしそのときのまをちうひてうしうま
ちくあまるめき立るをいへるにそうゝん八ちまにる四維行四段活の処に蜻蛉日記なるくねりてをも引るをも
あはせ見又落窪に文を見むひて、みしうくねるをにる見えるうゆとをも考
ふるに右の説をいくしきやうなれと尚よく按するに古今の序なるを一時をしいへ
るをの辞に心をつくへし落窪にけるふをくなるくねりをり文字たく連用言
と聞え古今序なるをくねりとをいふんときは截断言なるへきさまをていさろ
異なるへくそ　こを時をくぬ也又國といふ躰語をもと此用言にて
おもはるく

のくぬ処。ろくこ処。ろれこなあれもこも処をくぬ。あるへ〜北山抄ニは北陸道をクルカノ
三千とも云ぬとるとの通すとのみいひても足ぬをけれとこれも尚考ふるこくる。
も曲りとうきうしちうひせるうこ
ニヌ子ノとラリルレロと通すもたへてナ
通ふ例少ろふさる事也　國といふことの意をとさて久尓ニ限りれこて
ろ東国こても垣をくれといふこて〜るへ〜といひけん真淵の説
も大うこあるれうちてとよ此一時をくねろ万葉のとう加爾てな
と互ニ証〜て奈行ニ四段の活あるるをちるへき也ちて又くぬち
こと〜といへるなともくこうちれつまうといふもさるこなめ
きてうれもちをうちれ上畧なうといひくぬそいもゆる奈行
四段ニくぬ。くぬ。くぬ。くねとそくく　語を連躰言ニていへるも
のともいふへし　久尓といふを今は邦まち国の訓とのみおもふ人おほれと方
葉ニも郡をも縣をも久尓といふ証ろう土佐日記ニも一

舟の中をも久尓と又ひろくいへるニは紀ニ六合をくふとよみ又つねニ天つろ
みにむうへて祇つ神といるなとほへてひろくもせまくもこうこてさうひ
せるをくこはいふなりそこうくぬといふ詞を躰ういひおせるこて界ふを
さうぬといへるうひろくもせはくもかきうしてちるめ置処をいふと全く同例也
ふとる

たふとき俗　たふとふ

新古今序ニしふとふるかまうとあるを八ちてるこて麻行下二
段のつらニ出せれとこはなを俗ありふる學ひ學ふるおとれたくひ
並
ニて麻行波行の四段と中二段とに活くなるへ〜麻行こそ四段活な
るう波行の渭音ニそは中二段ニ活く詞ともも乏む乏まるうとむう
とふ。いをみ。いなま。すちみ。すさまるなと其例いとおほし又
麻行ニてもふとむるといへるかうともそれもすなそち麻行中二
段の活とこそいふを名れちるは疎まるとう波行渭音ニそつれそいふ

詞を源氏竹川ゝを関えうとむるとも行るを麻行なれとて下二段ゝうつれりとはいふまゝきうゑくゝにうれ新古今の序ゝ見えてる詞を波行中二段活とこそいふへけれ八ちきるゝ波行中二段のあるゝみやふるといふ詞の例を出ゝたるすゑの処ゝを○うまてゝひうれゝむゑゝうゝの活きあるへゝといひてたるゝ中二段乃活語とてその活き語とゝもをつゝねるつゝにこれを出ゝてあらぬのみなゝにうれ新古今なるをたゝ麻行下二段のとせうゝふゝあゆまれるゝや

帯　れまえ四段と中二段と二うゝゝ活くゝうれさゝめ

字鏡ゝ佩字れ注に帯也太知於布といへり又躰ゝた倭ゝそゝねにいふこゝとなりけれゝ此詞の活きさまいゝ辨へゝるゝし（オ二音ぴゝといへる下二段の活ゝ非る）こゝとまゝもゝゝれゝ中二段のゝ四段のゝゝといふ事知ゝるゝきゝゝ詩経衛風又秦風なる佩玉をおへる玉とよみ礼記玉藻なる不佩玉をかたにと訓める類々波行四段に活く言の例ゝ関也ゝを同書檀弓ゝ沐浴佩玉則（ゑ）孰有執親之喪而沐浴佩（オフル）玉者乎不沐浴佩（オフル）玉ゝうるゝころなゝをよの人の読をきけゝみなオフは中二段の活のさゑゝゝ刻申（オ二音ぴをすゝゝうけんゝゝけさゝて（オ三音ゝる文ゝをそへてゝおふゝるゝいふゑ中二段活の定りなゝ）今つゝゝゝゝゝ按ゝるにこれゝ四段ゝ中二段ゝ二のゝにけゝらゝく言なゝんゝゝ海みれ訓読ゝ学ぴ貴ぴなゝ我もおほゝくゝ中二段の活ゝゝそゝよむゝるそれを古書ゝもゝ考ふるゝ皆拠なきゝうゝにされゝ右のおぴんおぴにをゝのゝみさ

まもひうこ〻にたうこ〻ろへしさて四段に活くうたたちうなる
詞あり繼躰紀に〻もうくのに〻おほとうみの於魔細屢ちらの
みおひのに〻に〻万葉九巻に〻みもろれうみの於婆世留をつせ川み
なのに〻えにも吾忘をめやかに〻尚あと

思ふ活

こうほ藏開に〻もくこきるもおもへまみうて又すかえちとおも
へ給ひ〻を又靖蛉日記に〻日ころをおもふる事にうてかとうと
きに〻を考ふるふおもふといふ詞下二段も活く事明らなうち
てこれにつきておもふにいとふるくこと〻とうくも活く言あうし
あて〻に続紀宣命に〻三寶乃奴止仕奉流天皇羅我命に〻に〻黄金
在奏豆献此遠聞食驚伎悦備貴備念久波盧舍那仏乃慈賜比福
波倍賜物尓有止念閑受賜里恐美戴持に〻とうる此念閑を即此
活きにてつうひむへうなるへし然ふ今れうにてやて耳と用さ故
にやこの念閑をときて念閑婆といふるさを婆文〻を省きて
いにちる古語の一れ格也といへる説うれにうろしかしこれを
おもへうけ〻用言にう用言へ連けるなうとみていと穏らなう
その念閑を波行下二段に活く詞なる事上にうけうに活書ともの
あうしにようてにうりぬへ〻

たまふ　たまふる

ふるき物にうう書なにに見ひ給へ見給ふるなにおのうへにつけ

ていへるいとおほくの侍りつきて消息文例に敬ひ詞をすへてあれど
ちかきころよはし用ゐる事をとられ詞つかひなりと思ふよう
てころうえきこて、おほくありけるたる事にてられ御といふこと
をとりられすまつけてもいふなるなとはこゝろうたかへるやう
にもおもはるまでもむかしより志ある物ける例少からてれおはち
むかひ申侍れるを敬ふすなるあり給ふといふこともむかしにはよ
き書ともれ中にもおもひたまへて見たまふる。なといへるも皆おのか
思ふこともおのか見ることをまつけていへるなり但し給ふ。と（截断言して）
いふところにてこそ全くおかしきやうなれと詞の活きはまをる
ゆよく無ふれもおのか事につけていふ給ふとはれさのことまつけ

ていふたまふとも其詞の活きさるゆにはちめはる事にてさらしにま
うふへくもはられはかくのこともまつけていへるも四段の活きにて給
もん。給は。し。おとも、いもられと給へん。給へし。とやうもいはれ
ぬ也又おのれにつけていふなるも下二段の活きにて給へん。給へ。し。
とやうにはいはるまでも給ん。給ん。給。とやうにはいはれす又
給へて。給へき。なとやうにもいはれと給ひて。給ひき。給へり。とやう
にもさらにいはれさる也（三代実録十三巻に八省院波殊に御意天国乃面止作粧賜止岐止奈毛聞賜布留而云云こはたまふとたまふ）
とひろ処に行りてよくこそれうかくいときはやうふにられてむかしれよき書ともに
もこれをたてうひにまさらしのせるもなきを今れよの人もこれを
互につかひあやまる事おほし（内典に如是我聞を訓してもワレキヽ玉ヘキとし住王舎城の住を訓してもスミ玉）

此知とかゝるたくひもとよりむかしの雅文ともの詞つかひにならひてつけゝる訓にて給ひきとへきとのことかれもとより正しくていとよくきこえたることなるをそのへきのうへをいかさまむつかしけにとかめかへるおほえいましへのまかひあらはうときからあるなり　一あへたくも四段にまれたかきて給ふ　たまひなし活くは敬ふへきその人のうへにつけていふなり又下二段にたまへ　たまふると活くは敬ふへきかたをむかひてこなたの事につきていふ詞也　俗文の詞つかひにあてゝ意うれそ四段に活くたまふは被成被遊にかなう下二段に活く給ふは奉るにかなへまつりおもひたまふるは奉存といへる意はへ也とおほよその処をこゝろえてよしあしかれるもさのみひろくあるにはおもひおくましきを此おのかうへにつけていへるたまふるたまへの奉るとしてもえみかたくたゝてスルといふ俗言にあたるも多し源氏帚木巻頭中将の詞に女のうれへとなん難つくましきたましかくくもあるかなとやうやくおもん見たまへあるたくうえへはうかれなくさみに手をしめかきをかうしのうへこゝろえてうち　はうりなとせすなふんによろしきもおほかりと見こふれとそもまことにそのかたこそとり出んえらし人にかならまし　きえいとよるしやとかゝるこれらを奉見としてその本にん見ニスレト見知リニスといふ意はへ也むかしれよきさ書にて此詞をひとつきたまへく用ひてありてその

たまふとたまふるとたまひとたまへとのつかひさまを知んと思はゞ源氏少女巻なる内大臣と大宮とのかたらひに物かたりたまふところにそのかたらひ詞とさて艸紙地の詞とにいくつもありてそのけぢめいとうるはしきなとをみてさとるへしことえみつかうきてたることをいふにさく給へて思ふこととをいふに思ひ給ふる思はしといふ意にて思う給へし見きえはを見給ふれもなといふかなさそれをさきて給ひて思ひ給ふおもひ給そし　み給へえとやうにいへもやりて給をたにつけていふになりておのかうへの事にはあらぬにある也おほよそむかしのよき書ともの詞つかひにはかく差別いとつかりるにてうるはしくたゞしき事なるにやくくたりての世のものは

たこれをてこひまくさらうせりと覚しるも少うるに閑居友ありまの国の僧
元元の条に心と命をすてんとおもひたまひぴ侍るなりとゐるもはやく六百年前に
も此詞のつゐひさまのみられけるやまこと四段に活くることあるこのことに
をつゐる一の例もなきにあらんもまことに誤れるもてもおきるやたし同
書に又かしはしらちられ女のうけもの事れ条にすこうかみぬへきやとおも
ひたまふる寄らんともとゐるようみまえちきれるえ尚写誤にてもあるへし又それ
よるえやく後なるものにてすへての文もくられるものなる尚此言ばうひの
いしくまさゐるそは吉野拾遺に兼好法師ゐ玉つ嶌にまうておぺるとてたつ
ねおもせしまいしへふるくちきうけるるなりけれいくれしくてむし
今れものうるしけるに古法皇の和哥の道にふるくおほしいられ御なさけの行き
ゐうせたまはてうしとき御新なるせむぴしるゐのまく世にならふへき
こちもゐるさうゐしせめてのやるくあさに御後のよをもと思ひたまふるまく
まかるる姿となりはへれもつやの命のきえくくてゐらん世をまのゐるに
みるくくと袖をあはられけるに我も先帝の侍情のるられるくて侍跡を
もあるそまにしくれもひむふれるもさんるおもひへしゐてぇえゐくいと
志けくあふ思ふるといふ詞をつくへるに互にまれるえなしその此の条をえ
ものるもちもはさめる今れ世の人まちこうえたしくつるひるたんやあれ
ようみれも今のよそまことに言の活きさあのいるもくみるまきるすう
ゐたるれもいるしをくはちのちけよをおそるるきにゐるれや

又　給ふと給ふるとの寛狭

たまふをゐるるまつけたたまふるはあれるるつけて共にあなるる祇
敬ふ意はへの詞ある事上のそるるまいへるめく源氏物語なるるそ
もいとるるこうるるれてゐれたゐへて今とのせんるは是るそもはる
あるひつるき志るれると又今一さちみ細るるるるめんるはひろく
古へに渉りて考ふるに下二段に給ふるとはるるくかるるこあるるす
つけるるきれると四段にたまひ　たまふと活くるるもいとふるるる
これもこあるるるつけて中昔の源氏なるるそも必下二段の活の給ふるを用ふると同じまいひしくもみるち
まそのちくとおとのるもまれくるさるつるひるきもゐるをひけの
語るるるいふへるるさる也そのふるるき例に大祓詞に今年六月晦日

之大祓を祓給ひ清給事乎云云　此はらひ給ひを祓する人のおのれつけていへるなれば云奉りといふ意もへ八百萬神等乎神集々給ひ神議々賜氏云云　この集給ひをあたらしくあるは八百万神の人につけていふなれつとはせられもつとひ被遊おとつ意はへ遺罪波不在と祓給ひ云云六月晦日夕日之降乃大祓を祓給ひ清給事乎諸聞食と宣　この二の給ひもまたおのゝ方につけいへる也と見え出雲国造の神賀詞も朝日能豊栄登を伊波比乃返事能神賀吉詞奏賜波久登奏　この賜はくも賜ふをのべるなり截断言のゝうていへれをいつれの活ちまれかゝきやうなれ〳〵大祓詞に准へ考ふへし〳〵と所るは如き此例なるにはりめしれを四段にはけるゝゝうゝは寛しこなるこのゝきこゝもあれゝこの事もつけていゝなれん下二段の活きのゝうを狭しこなるこのゝきもあれもともいふへしゝられをのちゝのもれゝをまれ〳〵おのゝうへゝつけて思ひ給ひはるゝやうにいへるもひゝふゝゝ写誤あるへしなとちゝむへきゝをうゝにあるれゝをこゝゝろえつゝうふをよゝしとはれまゝゝきあれをよゝくゝろえおくへきあり　たゝしのゝきふゝしいふ詞を割ゝるふゝいふこゝゝきこゆるをあれたわゝこのゝあたんのゝまゝひとやうなりおかうゝはは自のものいふをもあいひて四段の活きいへるありとて下二段の活のうゝていふこゝのちゝも尚乃りといふへきにまなる四段の活のたまふをおのれゝつまていふこゝゝのゝきふしいへる外ゝはいつれの書名もをはゝ見えず又源氏夕霧巻りうゝゝゝれゝゝうれゝまふをみえゝる本もいはりうれるゝゝ者三音ふ文ゝを引といふ辞ゝてうけゝれえあはゝれ大祓なる祓給ひおゝゝゝれのうちゝゝはゝふり四段乃はゝゝらきのうゝていへる例源氏ゝもあるそゝやうもいふへきゝ似ゝゝれゝちあは源氏の文章のにへてゝたゝへるゝあれをあは猶見さあふるゝの。文ゝの脱さるものゝゝちゝる我ゝ穏ゝ為ゝへへ

又　先々見聞思ゝ限ゝるゝ氏さゝめ

上のゝゝうゝいへるたまふゝゝ大ゝゝ奉るといひ又申さとひてそ云スルと云と

いふ語に當れとまた或は思ふ意なる処におもひ思ふるとい
ふいとおかしくそれに次てた見ゆべ見ゆる図たまへきた
まふるといへる此三つれ例のみおほく見えて其外にも奉問をとひ
ふるま稱をなつけたまふるといひしるやうれ例をさく覧
えれされそ　メテモル　こそるおといふへき処をいつくにそもいつにそも
ふるといふ言にてうへてもつうふへくもいつにちる也これもこそろ
えおくへきことなりたし見図思の三つよりおうりはふつに
おくといふへきもいふにそまひ給ひそまつにうへし被ひる
元輔集に三月はえうにあるとろろまりたれも女車身になれるちあり眼耳意にるる非に
こられそとひ侍しはうちへまゆるといひ侍しるのまへ

しとてあきそに行人あらはえと見えてこるを口にてものいふ事也
うこる処下二段活のうこうそうまへといへるもいとくまれあるもとおのうすつけ
るなれそむうしれけにかくもいひりんこうもとうそのこうろうあれも
これそのこまひの浪おくはいふへうれさて上の件りにいひし如くおのうへにつける
ふを四段のけうこきのうこうそいひし例もとうこれうれとあるうへにあの伺
もさるけうこきのうこうそいへるおんことにおのうほ後拾恋部に女に手を入てこと
ろきにうるにをのうまひうるに又物のたうひるる女のもにに又初て人
にのこまひつるに源氏帚木巻にいはれなる人にのうまひみん賢木巻に
うちくにせいしのこまけんにあるにあるにあるにそ字鏡に諗を註して宣念也告
也念也謀也乃太万不とあるようみれも謀りつうふちとなりうさてまに字鏡
連字部に後使下の註り通也造也宣也乃太万不といりてこれつれに尊む
へき人のものいまうるをのこまふといふにに當れに氏言をつへるやう右り引る
後拾源氏おとなるも皆おのうに　業　のうもの　のうへとのみうへきさま系
るにかにのうまひのうまんとあるちはう此神賀詞に申賜久姜賜波久とある
とおおにくすへて口のうちなほ　業　なほけうこきこえうつけていふさまふたり　さて
うれ中臣後に後給也清給事　ミフ　を　あにいへるも身にてふるまふ和さ
のことそにはけふなり　動　うく身にふるまふにうの詞につ事るり下
二段にけうこうかさていをる例もうにや尚

考ふ
へ〜されたまの給ふといふことをおのうへにつけていふはひ
ろく〜凡そ視聽言動にも渉るといふを〜ちうたいれとそ
たかおまれあるうそまりを見聞思の三つにつけこうふ事
ところえおきてよけん

又〜ふといふ詞のもと

たまふといふ言のもとはうみうちもさるへらのをたるふこそ
能與而所受　巻　品物　恩賜
あ〜ふるう〜ぬ行〜ぬ〜ても　波行四段の活用　ぬまふ。所與而能受　うるうるうういへも
羅行四段の用きに　ぬまはる〜用れ分きてう　古事記傳七に珠矛ひろさて万葉　ぬるぬ
二つ見えるのみも異やうおれとこれも誤字をとなるへしちて轉りてはすへての用き言につけてあやく
ちうをのいふ詞とあうこうる也　うの奉るといふをもく〜ぬ　ぬまつるも躰
語につけてものまみ〜ぬるをいふ詞の三つ

うさなれるなるう轉りてを又何うれの用言ともつけて向ふあるこひうた
其事を敬ふに用ふると同〜類ひにこそといへる説もうへあ〜ぬやそも〜賜ぶ
たもも〜尊より車へのことあれたかろく崇め詞とはるときもあなたのうへ
をこあ〜ようのふ詞奉るもも〜ろ車ようう尊へのあ〜なはうう〜何うれの用言
ともにうろくそあるときもあれさのうにのをつけていふあるへし氏外に物
壷に侍そまりうへて無語に君うみ〜〜まりうれうれは又別のうすそされた
うあうれるにつけて読みさあふ念　〜給ふなく　いふはうてうもとにうるこてく関元
〜るをこあ〜の事にう〜もつけていふあるはいうにといふこ　こうれうふ
自得もうるうにいふあ〜　るあ〜いひ戦
いへるを背ひ〜しうし　すへて敬ひ詞々ああこたなく遍ち〜用ふる事
ひとつの詞つうひ　式筆ハ消息文例につけ〜あ〜裕毎に自ら　ある〜へ〜い
侍廷すあ〜御〜いふこをいへるをも同例
るきにこうろ又降れる毎
につうひ混きうえさけれ　源氏物語あとうてはすてうも辨へ〜如く同
し波行おう〜下二段と四段との活きうるのあとなるうてつうふ
とあうのけちめもちううそこのけなる　つってこいもんうのこれも
も玉といふものくめてたき宝ある

より出てそれをはなは活き言ともせるなめり

はらひ　はらへ

上にしるすといふ詞の寛狭の辨ありしその類ひのためし又外の詞もかゝりやといふにあり波羅賦といふ詞なとこれなりけれなもち上に給比を引証せる大祓詞にそまりこそろへしそもこの名も三代集なとよりなとこのことそつかひならしえ廢けるへ。なこしのけしへなとの例によられこれもかなよんオホハラヘノコトハととなへなしふへく祓ハラヒ給タマヘ比も祓却ハラヒヤレもハラヘタマヘヒ　ハラヘヤレとやうにあそいひいきくへきなとあるをやおなよそ波行にかゝりてはたらふといへる詞よ中昔よりえかし文字拂掃なとにかゝるも四段の活き

祓禳　禊りかゝるも下二段の用きとあひわかれたれと古くは其祓等にかゝる詞のなは意も同きなからはたら現も四段下二段ふたつともにもちひたるものとおほしくて神代紀一に祓具此云波羅閉都母能と見え　かく注せるによりてとええて解除竟をそハラヘテとよみ但しこれらもハラヒテとはもとよりはましきをみつからけらかに異りてかれをしてはらもしかるにかれえともいふへかれとそのことも下にいふへし　万葉十七ののふかのりとことといひ波良倍。あらふ命もたかさめになれなと見えさかれも八ちまりにふるくは祓もしく四段の活にのみ用ひたるとあるもいひさならん　されもされも四段に活くかなは寛し　露なと拂ふるもみそき祓ふるも用あるゆゑに　下二段に用くなは狭し　祓禳りうきされ故にとはいふへきなり　但しいと古くは四段にはたらかしむるにてけちめありともいふめるを　祓ふことと下二段に用くそ他にはかくもしむるにてけちめありともいふめる祓禳の字にあてる詞のうへにての細論といふものにてそそ別のなありこそにむねと示に所えられ給ふと給ふると寛狭のたくひを同し波行の詞にてしめんにはかりかれ

々氏波羅賦といふ詞々古くは四段に活くを寛く下二段ありしを狭し中昔よりは四段に活くを塵なく拂ふに限り下二段ありしをみそきにらふに限るとこれて亭寛狭あり給ふといふ詞の中昔のものに他につけていふを四段に活くに自につるは下二段にはけるくるくるとなれる類なりとあるるるてたれるとふへし

さそふ　たゝる

たゝまといふ詞波行の四段と下二段と二に活く言いとちるし催馬乗に左介乎太宇倍天大戸惠宇豆なとこれる抄集の詞書なに つねに何々さうへてとある是は下二段に活らせるなり又月八ちまちに出るる宣命の多婆受又万葉三秋津羽は袖ふるいもをまつ〳〵けれくにおもふをみるへつる君これは〳〵を下知に せれ四段の活の例なりたく〳〵外処万葉に見賜吾君とうける故みさきのうさようらんに即此詞のけるにきのうへうるおはるなり　といひ又竹取物語にむしめを初れにたへ又かとうぬせちうんといひつ

つほ祭使今本藏開下十八丁にいさにうかきてたへと見えいるは寄書ともはに〳〵うきかにに何にたうひてとやうにいへるちは四段に活らせるなり

さて又大和物語にちなの国にすてるひよとせめけれとに才二音ひ文〳〵にもを〳〵をそへて下知にいへるは中二段の活にに覧しきつるひさ取なるこれも〳〵字濁かにもうにはこれも四段と中二段と下二段に三つに活く語といふへくやよぐといふ詞とにはせ考へ〳〵さて又さ　そにくにへてなにもの〳〵ふる娘をこれにくにへあるは清ふにて異也と初字の使を思ふるもにくるに同意同語なり

うらふ

古

うらふは下二段の活語なり万葉十四にむさ〳〵の宇良敝可多乙伎

玄

玄同十五に宇良敝手かにやきて玄玄とみえたりにく躰言に宇良

敵といひ又かくやくといふ用言へ者四音ぺよう連けいへるを下二段の活語あるる明なるいにれをいる人の古事記なるト相而のとに記ことに字良波年とも活くやうに示せるを又別に証ありて四段の活ともあるるよ〳〵いるるやあ〳〵んも〳〵ちらうたをる〳〵此ト相の字によりてうぅぴう〳〵ぱんとも活くなる〳〵んとそいひるるへしことにおれをかをうう〳〵いるもたをといふこてあるをそのあぢたをいるをさん

あをしぢなる〳〵活くくと意得むを正〳〵きこるあをしいはぱぢといふ詞を佗行下二段にのみ活きあをちぢんいるを〳〵ぢるるいをれぬ言なるあ〳〵八ちまるの辨明也八ちまるより前にはも〳〵此合ぱといふ詞の活〳〵ものとおは〳〵くてられ名〳〵る人々のををさ〳〵に活用の事をとて論せ〳〵清書にも皆こをつまいいるるせるるなな〳〵故鈴屋翁の活用抄おとさへいと

たる〳〵きさるめのみ見えるるを今をこてにまるふこ〳〵あき人のおはるるやうになるるるを実に八ちまるのいさをとを敬されをるら

いるをせの約まるなるはいよ〳〵下二段活とそさるるあつへき

うれふ

三代実録十三十七丁　去閏三月十日之夕於應天門并左右樓等不慮之外忽然焼尽多利因茲日夜無間久憂礼念保比之といるをのみ証として

さてを憂患のるおを元宇礼閑にいる〳〵ものにえをたれを

これをるをつるひの事のみな〳〵ぢ此語の活きあき試さるにへ

き処也抑古書ともうれぺをたしるにあきるるもすくれるるぬ

をそは皆るれうれぴとを活き異にてられもるれもしるるれ誤れ

るるとはいるるをさて三代実録に憂礼念保比之いるるれしを中二

段の活きうや四段の活きうやちくこうしさそられぺ〜いへ
れぺといへうとも其意もかとようおかしきうはうこちらんとふ
もふせその敢たうまぺといへうをおのれところろうきうすれる
をふ詞又下二段に活きてうれぺといへうを心さいまる思ひをうち
出てくうくくくくくこうたうてくこうるやうれてくをいふ詞とろう
れうろうもおもうくなう尚よく考ふるべうさて又うれぺと
いへうをうつねにおほけれとうれふるといへうをいと多くはうう
に桐壷巻（亡一）みうれうれふる事やおほう〜んと見えうるかとと
れうまてくうるのみあり　そはこうくくくくうれぴと活くへうもおもれ
えうろうく　但いつれもうれへと下二段に活くうねうそて見
考ふへし

並

なふともなむともいふ詞波行にても麻行にてもいとまある中二段
下二段の二うに活く詞とみえたり中二段にはうらけるを万葉七
ようけに将比疑（ナビンカ）古今集にはきおしをみぷあれるあう雪枕冊子に
居おみぷうるうく見えうるかとうれあり下二段にはうらけるを
万葉十七にはきおしをおぷ倍布流（ヘフル）に後拾遺にうをおめつくそと
れをみうるりかの菊宴にうふなむる人そもうへきといへうなと
うれなりさて此中二段にはうらけるをおのつうにあうること下
二段に活けるをわさとおうるかとうれて関ゆうをなむる
なふほうのみにうをいつれの活にていへうるあうんふとみれを紛

はゝきやうあれと前後の詞まそおのつゝまとられぬへゝ蜻蛉日記下の中　ことゝみもおゝなるあり〻といへるあとは次上に五日夜中もとりて世の中さりくをきけをさなにやけまゝ〻ゝと云〻中二段活のうとまていへるなるをし又うたうつおは物語のうゑなもむろなゝは後拾のうゑなめつゝとゝはせ考るに下二段活れゝたまていゑゝ物ゝへゝ

の夫　のひ　のへ　のけちめ

のふといふ詞漢字も同字ゝ云ゝゝなゝゝその言れ活きさゝ物ゝ二あゝて心もいさゝゝかもゝゝとおもはる舒心延命の舒延をのへのふゝゝ下二段ゝ活く言ゝて訓むへゝゝも心舒命延ゝ云ゝゝゝをのひのふゝゝ中二段の活き語ゝて訓にへゝ但し拾遺集ゝ

千歳のよはひのふといふ也源氏明石ゝ者も引れよはひのふゝゝこゝちしゝて又東屋さも命のふゝゝちれ去伝しらを枕冊子ゝよをひのふゝゝるをかゝ色とあるゝをふゝをみれもいつれの活きゝあれゝるきやうなれゝ拾遺のゝ源氏明石条屋とのゝは中二段の活のうゝれなることゝ源氏朝ゝわに命やのひ伝らん又画合ゝ空もゝらゝらゝて人のゝゝろものひ物おゝもゝろきゝ又増鏡老の涙ゝ春宮の治元服八月ゝ閑えゝ〻奥福寺の火のすゝようてのひて十二月十九日ゝそせさせたまひ久るゝゝるなゝふ考へあゝせてゝゝくおのゝゝうのふゝるをいへる意なゝゝみを中二段の活きれ也とゝるへゝ又源氏花宴にめいゝうの治世四代をなんみ伝ゝめれゝ此

度のやうにふみそもきやうちくさまひうく物のね共調りてよ
ちひのふるてすなん佐くさうつる」とうる又枕冊子のようちひの
ふるえうるめなくは下二段の活のうれのふるあらんとちくれと
ものその下二段の活きくいとちるさて源氏須ケ巻身はやまひお
もきようう公けも仕うまうらん位をもかへ〳〵奉りてはへうる私さ
まんたうくのべてとうるあくあそちるへしそもくうの詞よその
つうふとあうれうちめを尚いちく中二段のぴんのふうと活くう
たそ羅行の四段のけくるとく活けると大うるおなくく意又下二段
のぴんのふうく活くうるあるえ佐行四段のはぴとけうけ
うくおのくく意ちくくそ関えうる是うて其つうひ処を辨ふへく

又述字の當るく延ようくの別

れ作のようれふるてたうるをいうやの沼のいふくて思ふ
ちうをのちへまく」と壬生氏の哥のみえたるなくく下二段
の詞れのへのふるうちうく述字演言おくにうるのふるを中二
段の活きなるえおよ也是も辨へ置るき事なり

こておくく略

古今ことれくまとも志ふるくあくめやとうる処一本ちちく
なくむくもとうるきうて此詞を麻行四段の活のつううあく
るもようくくうるめく後拾集古今六帖源氏蜻蛉等の諸書ま
うまうる処ことれくぴうのみあうて波行の中二段の活詞とおや

〜さそおぼきついてこいそん歟をはる無〜まさ也とも歟めれ〜さてもの。俊
のふりそといそん類ふてもと詞の用き找ち〜ぬひう〜あり

たとふ

譬

たとふそ〜〜ぺ　たとふ。るゝ下二段ゴ活くそつれのる也　たゝ〜〜ぺ
でゝ〜〜ぺたとやうこいへるもいと〜おわうれ〜たとふ。るといへるもまれゴそみえ
たるそは拾遺集ゴみを人の命をつゆ〜〜ふるたゝさむ〜〜ことにおけ大岩
りゝゝ信明集おしもなくやみわるなめ〜〜ふる　然るふ又も〜〜といふ
もいうりうなし〜〜きをみゴなゝ〜〜ふれらかゝ　假令
語ゴその意けへのゝよひてのたとぴといふ語もおぼさをあは四
段活ゝ中二段のゝちゝゝうなゝ〜〜に考ふるゴまつ四段の活也といふへ
きゝゝその故を上ゴすてこいへる如〜中むゝしゝうを下二段ゴの
み活ゝゝ〜〜おもをゝれ〜いゝふゝるゝくを四段ゴ活ゝしたゝとみ
る詞の例ゝれゝうきゝ〜いるゝゝへゴ何れの書ゴゝあゝゝん　そをいき
ゝれゝ

きとたとも。ぬ〜といへる事ゝうゝしやゝうゴも覚めれをあれゴ慥ゝ〜に

たくはふ

貯

たくけふを下二段ゴのみ活く詞ゴつれゴ陵あれゴ万葉十九ゴを
ゝつみのゝうみの美ゴてのみゝ〜けゴ多久波比おきて　云云ゝもゝ
ゝを見れゴ四段ゝ中二段ゝゴも活くなるへし　八ちまゝ〜〜ゝまつ四段活ゝゝあつゝゴあけて
〜〜ゝうゝは知ゝゝきゝ〜〜のきゝゝめゝゝ
むゝきみそおやゝ老ふへきゝゝ〜〜ゝあゝ

あちけふ

字鏡ゴ鹹鹹の注ゴ阼加支阿知波比伊勢物語ゴゝちはぴてゝい
へるおゝとゝう外ゴゝちゝ。ん　あちゝぴ何〜やゝうゴいへゝもまゝ
ゝちはぴん　ゝちゝ。ゝ何ゝやゝうゴに活けゝもをさ〜見おゝゝ

にされた四段活の中二段のうおかつかれ〜下二段の活のうさる事たゞれ字鏡なゝてきつ明也但しられも　下二段〜中二段とう又又た中二段と下二段とう段とうろひた四段と中二段とう又た四段と下二段とういつれまれ二うとけるとくまるうんとき人ふく考へさとめてよ

ふ〜らふ

八ちまこさ明くあるうらふるあるといふ詞也行の活き言うともおもえるれと尚波行のとおかしふ添よ〜いへり此中ことちらふる

といふ詞さえ波行なる明証ゆり字鏡と詞誘也古志良不とみえとう此外も准へてちりぬへし〜〜物をちらにる詞也行ことえてなえ処といふへ〜さてついそにいちんに氏訓今世の俗言ゆは物を構造にることまいへと中昔のふみ〜もさえそうるた誘ひ引やうのるるいへり又い〜るく

た俗さいそ面ろ慰めたゝに意の詞あるかゝる日本紀にも慰喩をやんめさしらふ招慰をうゝらふとよめりゝとうてのよゝも尚さる意に用ひるゆう沙石集身をうゝて母をやゝあふすといふ処さ命ゆうはめろあふるも有あんとうゝらへおきつれゝも又畜生の霊のすれ条にとうくにうしゝらへてあかアてゝりなゝいへるたゝひあり

むる　ほん

あにといふもひるといふもかゝる文字の乾字あゝに當るこゝ固よりなれとこゝれ詞のうへたもはゝ異也　漢字のえもたゝその字形こそひとろかれ音義もゝよろおあゝ〜ろ

古事記傳七十二　此詞と比布留〜うこけり云云来れ伎久許許とうこくうさてゝしと見えたるたいひさあいうえ　ひるのぴゝほんのおゝおたゝ〜ろうそそあきゝこえうれぬるのめゝあんのなゝと同行の音あれも活きさき成いきんちりえ上さいひつることゝく奈行ゝ佐行ゝ差別ゝていふへきるかく必紛れんきゝき也似ろのゝのゝのるなんのおのゝとの　日行あるたゝみれ別の例也　ひるえ波行一段の活きほにえ佐行四段の活又

布。た活きの音ゐゐ〜に来れきく。こ〜ゐくと同例ゐはあ〜に其故た来字ゐにゐる詞の加行オ二音に活きて使といへるた連用言さてむるれひも連用言なれたらくた聊似〜るやうなれと于た（不下）ひに（欲）ん〜やうもいへと来れきに（不来）きに（欲来）きく〜やうはいまれぬあ〜すやうて乾を布。といへるた来字に當る詞てれ。〜いふ活きにるとたいらく異ありくへし（可来）（雖来）くとも。あ〜ていへとふへし（可乾）（雖干）ふとるとやうはたそて いふへうにさてほにを布。とのみいひてたいまる語をなさに来をとと。いふとたいらく異なり又不来欲来をに。とんといふへき〜不干欲干をに。んにはいふをゐぬとのたうひいとにし かくれた乾をひふほといふと来をきく。こ〜いふとた例同ゐゐ

ゐ也　景行紀ヨイイフカヤと云名市乾鹿文と見えるるたい同行音相通のこと（乾）てひといふ用言のあるとく動くまたあ〜しひ（干）たゐ〜此流と古くより舌〜也

ゐむ　令字の意の詞

ゐむるといふ詞たゐろ〜れ活きの定例連用言ようたくゐは将然言ようつく語也さるは まき。ゐむ。ゐろ。ゐむ。ゐむあとたさ〜にいた に必也。〜む。ゐろ。ゐむとそいふなるかゐるそうけ ませ。まに。あとひ ゐ〜くてまれなる例ありさてゐの語麻行下二段ゐ活きて令教使 等の字ゐにゐる詞ゐるたれもゐれるゐ如しゐろふゐそのゐむゐ ふ詞四段ゐも活くと覚しき事にゐる万葉三十七佐ほまきてなゐれた むまにおくめさは妹を見られす相見染跡衣又五十四ふ〜おきてゐれ えこひのむゐさをかんゐゐみゐきてあまち思良之米。と来字を

下知させるは四段の活なる故也仏足石哥につとめもろくとあるあるを引てす
下知させなるべき説けるるべしるへしいれと又萬葉につとめもろくといへるとは方
葉十九に馬ものまくもくれいるへし四段に活く語にせるもいるへし

ぬのむ　たのむる

いる書にたの免つくあをてらるふる偽に云云といへる古哥ゆきて此
たのめといふ詞を万葉集より出てうれを令憑とかきて人のうれ
をたのまるむる詞をていまるへるに誰もさのみ意くるを又拾遺に思ふにはつれかきこと
もつかしたのめぬ人をうみつる哉うれを人ようたのまるむ
るにいるに我ようこのむをいへるう詞々哥にようて摂すれを
一句の意さるめかるを物なり」といへるを名たる哥ようみれ説あを

に詞の活きのすちをうくもたるとうてのとれてくるてきくたし
令憑を八ちまるにいを西は下二段の活きなるを拾遺あるたの免は
とふあるたのめるれいを西る四段の活語にそいれるるたのめは
といへる婆のてをはていとるる　はといふにへて已然言をう
るるる将然言をうるるといる中に此哥なるを已然言をうけるあを
る事一首のおもてにるいと明けるれをたのめを人をうみつを
哉とよめるぬの免れ詞を令憑をもとより同るかるに尚いを
将然言を受るはれてるををの例れ自らるむと他をたのまる
むるのけちめをたのまはといふとこのめをと云とむうへるとを
るへるに已然をいへるをたのめはといふたのむををといふとむう

なりと意得よかし 此同し御文しも已然言をうくると将然云をうくると
わかれうつれるは誰もしく明めてこそわかしめしおもひ
しふあるむかしき書にみゆるをおもひせはおへになりせぬまゝせたくせけるも也
かくまゝせはをあれは也などいひさえてさくられなくりせるをおりれもとぞみる
とはれば更にやはしなとしいつふれかはやしきまてあらきことも也その書に又あけ
てはいうまくやしうまゝしなといへるてはにてかれそのつまりそなといへる
もとより将然云と已然云とをうくる御の事なきくはしうこころえたるぬら
ゆゑの行やまり也そもかゝることは詞の延約をもていへるもいとくたくべることとそ
一の
し

うらむる　うらみらは　うらみさる

古今集に風吹ことにうらみぬらん同集にうらむる事ありて後撰
にうらむるとそうらみさうなん源氏玉かつらに来てみれは根みられ
ぬり兼輔家集にかつられみや内府公にまゐらせたるこそおそしと
てうらみさせぬへれは云 云くる処をそうらまちらんうらまれなり

うらませぬへきやもいふへきやうに初学の徒はおもふへけれとも
いふへうさるなりさもいひしるくらもするさるゝと活く語
ともにその定格あるよしれさるゝめをよくみて物にへし後拾に吉野
山こえんすこそかゝりめといへるうたの下句うらむなるきれゝ一本
にあるをよしと取る人かれと此語の活きれすちを正しみれはな
ほ通本なるならんなけきのとかなそよし これをこそんとせらるなえ 此ゝえるし 尚おくにいふ
といふ詞のるいえる を考へかたへし たゝし又六帖 題文 にもよはる波やならんはまちと
かりふみこしかとのうらみれとなきとあるをそうらむれのうつし
誤ならんともいひうるき哥なりそもくこれは本とうらみて心み
を見なすれそうく一段の活きれちまた 次条に出す こころみるの如く もいふへきことなそ

とまれかくまれかくに四段にはけらかぬるなるを雨夜物語たみ詞に拾遺恋なる哥
なごりうらまぬも疑しくぞおもはゆると行けるなどを例の活きさまれさとひ
まくらるゝをなちはえまるようかつしひろめしものとみ●拾遺
のうつたうみぬもと行ふ本なぞたてしとえらう用ふるなり

試　こゝろみ

こゝろみは八ちまたに麻行中二段の活言のつゞきに出せり上のうらむる
又うしろむるといふ詞なしと行ちせ考ふるに うしろむるのは下のひきみの下にてまさりふへし
けに此詞もこゝろむると活きぬべく思ふまゝに詞なれとむかしの物
語ふみのたぐひにこゝろみるとして一段の活のさまにのみいへるをい
とおかしかれと中二段活なるをしおもするになにいまた一も見ゆらう
に 枕冊子にこれかもとつけ心みるもと見え又紫式部日記に行まそかけるふ日記など
にすもこゝろみるといへるをあくるにさへにおかしかれをこまかく写誤ともいふべる
らぬをかへりてこゝろむるといへるえさらにえ見ゆるにまかうの三代実録巻十三に中
庸加中辞余 参験余須留と行るを此言たゞ一段活と証にしるまえたゝねとも中二段活

言なしそ 参験余年留とやうもなりきしをもおもはるゝ処なりおかしよく考ふへし但
しやふるふらふみとみかとに試ムとよむもられうれとみえてえうれとそれより古
きうかうきのもの言古にいへる
如く試みるといへるぞおかしうは

くゆ

和名抄に蹴鞠世間云末利古由とある此古由は論なく也行下二段の用言
なるべし 字鏡に距足角也阿古江和名抄に距雞雉脛有岐也阿古江とかり距と蹴とは全く同じ活語と見ゆれなれを互に考ふるに也行下二段の活なる事
疑なし尚いはゞこの距をけつめといひ蹴鞠を
けまりといふもともに古江のつまりしなるべし 和行下二段のを誤りしまやといい
へる説あれとはちまふかうし字鏡にも踊に万利古由と見え踰にも古
由とかりたゞし也行下二段活にえもの、おのつから然る詞おかくてものを志られる詞
えをさしなぬかくおかしきをまうこゆるえまりを人のまするにかう
にやといふんはそれ行かうちにこゝろ得べきなまにかしにすてに越ゆるたぐひといふも山
おとを人のこゆるをもいひておのつからふるうのみにあらし次又こゆも見ゆるかもとこゑ
たようかなるに八むきてえしめ見ゆらしむるもつうふ詞なることつねにおかしうは
ことも也かく也行の下二段の活言ともにはちと志られるも其例ときこれかうぬをおも

ふへ
し

くゑ

皇極紀に打毬の訓マリクヱとあるくゑは上に引る和名抄の古由と同語なるを 但し打毬と蹴鞠とハそのわざおなじからねしてすなはち和名抄にも打毬も万利宇知といひれど今も蹴のまをおとろへるをのとしての訓ならん をおもちろくなりさてクヱとコも通音なれハ彼越字にいくる言のこゑ も万葉はにはあしふられゑいわれも久江由久ゑゑふもの闕久江豆己も由く ゑとあるも同例にてこれ此書のはじめつかさにいひし同行の音通なるのみなるへし こはもとくゑ古宇とあるへし其故は蹴鞠の蹴字と日本紀なる蹴散 古事記にハ蹴散とあるところあり の蹴字と同字なれども考ふに和名抄は古由は後の誤りならんともいふへきか如しされど蹴散の蹴は和行の活き くゑとよまれは 又蹴鞠の蹴は也行は活きとてゐとよまれは まれへぬくそよろしかからん

けいえ　け

けまりはけとこゑ蹴のつまれるにてゑはきえ消の約りてけ消ぬらんへに又もありしけとよめる類なるへしこは書に蹴えひとつ別の活きにて やちまたにいはゆる四種の活の中へは入られ け。ける けれとはくらけもあれは加行下一段に活く語としてそのよしを示せる図なりさて又外よりこれとおなじき考へをなしたる人のありていへるには波行にも下一段にのみ活く語ありへ。へる へれ 古今集物名に糸をみなへしとあるへなとこれなりといふあり と活くとれなんけ。ける けれといふと 加行と波行とのうちわけはよれと まさしく同じ活きなるなれは互に例とはへしといへれと従ひかたし その故は糸をへるなといへることくはたらくはのみに見えてゑも俗につねにいふはいろなる言

の祇きるあらんもあるへらんさてまりおとうつきてけといへる
をもくようおかう仮事あれと　源氏根合に花の盛りに人〻まゐりてま
宇治拾遺に其男れもりはを血あもをうり必けむへををおのれうけてんにをを云武尾
けよとをを尾けんとをる相撲ををけをつしてあと尚ひうこれもられけぬうへまあと
いへるけと同くもくよりこの活き語にををひうこ
さるへし皆こえ或をくをのつきれるこもぎ　けるけれといへるをおかえをく
きたあ落窪物語に尾をけるともと見えられをれを羅行四段
の活ましてもくよう異なる語也　下に別条をな　〜ていふへ〜あこうくに下一段の活
をそ一種ひうへくをおもれをれうし

萌
もい　もえ

万葉十八にうけきくもをを孫枝毛伊都追といへる毛伊をうくてを
此詞つねもえ　もゆると下二段にのみ活ける例に異なり思ふに

されを中二段と下二段とこうにこ活く詞なるへしそもく中二段
と下二段との二うにこ活きておあ〜意ある語を其例おき事れや
うにいへるをけにとももやくはおもひ〜うと志うにはひうしと
又おもをくは此毛伊おといへるをもひれをありさてついてを
いもんこのもいをを假字大意抄おとをはもい　もえ　もゆと活
くとをつけをいへるをよろしかくいつれのをうにをも才二音
才三音才四音ををうて三段の活きといふ活きをたえを例おれ
也　但し加行佐行の変格の活語ハともに其音三段にこ渉れること其き陀と其行ノ
ヒ三四とハつい偽たるねをうるハ行任せて三段の活とを云へらさるなり
おい　ひい
中二段と下二段とこうにこ活く例を也行にうてなほいまく冷る

を也行下二段の活きなるもつねに人に用ひられる事あるを此語又
を同行中二段も活くとおもはるゝて類聚名義鈔に冷酢ヒイス
ユレルと見え和名鈔にも水漿条冷酢読比伊須由禮流と見えるうち
て又寒鴟を古伊太流止比と和名抄羽族體の条鳴の注にいへるを
みるさられも也行の中二段と下二段とにはゝ活く例なるへし継躰紀の
寒の字コイとし雄畧紀には寒字コユとよめるこれ〳〵もゝなゝひある事なる
へし近比のあらきき黒羽本には雄畧紀なる寒字コヽユと改めよある丸中にはゝ
しうゝに此コヽユルといふ言
のうえ尚底の新字ふへし　されはあはしうひにあらしあふへきに
非や名義鈔をまこてのコハ非めれとなを引用ある意を
前にいをもる日本紀私記を引るとは同しこゝろをへ也

むくゆ

報

むくいと躰言にいへるをつねにおやれと用言にてつらへるをふ
るきふみともにおほうゝて此語の活くさるもうおもありやしら
られ続日本紀二に尊恩乎報倍久在良之止ゝと行るおとは用言
にてつらをせるへるなれと報の字ムクフと訓むへきらムクユなるへ
きうあゝれす八ちまゝにはも也行中二段の活とゝてうつは後蔭の
巻ノ分にはむくいんといへる証を出せうあられともこれも通本にて
むくひんと見えゝれを尚波行の中二段の活きに紛をゝ記あり
その波行のうはあゝぬこをも按るに字鏡に俏に報也年久伊
とゆうにてあられう又類聚名義抄仏巻に侑ユ祐ムクユ俏古肖字スム アツ ツクノフ とゆうも
一証とんへゝさてやゝうにてゝられる世の書おうう長明の道中記に宿
業のむくゆる酬とあるを見ほにそのうみ此語のつうひさに猶い

しへはたらきもなきやありなんされどいつの比よりか此詞ちかきは波行四段にむくげんむくぴむくぷむくぺとのみ活く語の如くはなれり（うつほ蔵開にむくばせんとあるをみれば此言波行の四段活とせることむけは後のかやまりなりとはいふへきやうもなけれはおもはるれと尚むくいぜんにをうつしかやまれるなりとすても尚かくんか尚よく考ふへし）砂石集などに降りてはしかのみつかへり

なし　志なし

ハちまきには志なしと出せる詞これたゝなしといへるも同語と聞ゆ古成さし（志なしの志も意なき発語なるのみそといへり八非これは佐行四段になやしに字鏡に鍜乃注に奈也須とみえたり蜻蛉日記にきなやしたる志かし）とはたらける語もあるに考へまさ念之萎而（万葉二巻）とかあるをも或は萎艸のとたとへおなてなひ之奈要て

（同書同巻）といへる又竹取に手に力もなくなりてなえかゝりたる落窪物語におのかきたるかやのちりたるのなえたるを又ふるききぬのなえたるをといへるを枕冊子にきかやれはやつれたるのいとくえたなえぬをなといへるを見又俗言のなえるといふなどもおもひ合はすにもとより也行の活なることも又此言の意もよく聞えたりけて波行四段活なる志なとといふ詞此志なしとちかよひてまかるやうなれとよく考ふるに全くおなし意の詞なるのみにてかくりたる志なとは艶字などにかゝりて志なやかといふ語にちかくかよへるさまとおもはるゝにまされはこれとなえ志なゆと也行下二段に活けるにて然志なやかなることに聞ゆるをかくれなし（白ふを万葉十九廿六に而太要といへる）

も見えを外の行まても活きさき異あるべうき意も同じき汨なる例もあり
たすれとまつらくいひおきてよき人のさくえをきりまなん

也行まも四段の活きは　なくおもたるく事

也行まも四段の活きれなきまもれ八ちまくの図をみれたいと明あ
るくなり八ちまくよう前の諸書まはらくを見定めけりられ
きやはへて也伊由衣と活く語けりけふ論せる故あやまうたひ
たる説ともあるくろつきれくたくし弃明紀ま伊喩之之乎
つかくうたへの云云とあるようみれた也文くしの之々といふ躰語
へつけるた四段の活の例あり又万葉十三四ま尓太遥ともに左可遥
ともいる遥字をエルと世る訓ま中たるうひてみるときは方四音
えようるくに活うせるもそのえ也四段活なるかられ例あるうれ

は也行まも四段活けうとけくけるおもれぬまもあるれと此
日本紀万葉の語ともの考を別まとのくてすへて也行まは一段活
くと中二段のと下二段のくと三つの活きあるのみなるくと先もぶも
ひたくへきなり

いまそうは　いまそうるも同く事也

いまそうる又は侍へるかといふ詞も羅行四段まはるうけくはる
の四段の活まも少くく異まてあり有をりと同くさあある用云とお
もはるくもされそいひするえんをうたいまそう。といふへきあり
侍りも匍有まてを截断言とはるるるる
きへくいへくおのつくあやまることなく

れるく

貫之家集に君更に山に帰りて冬ごもりに雪ふみわけてありよそ
おもふ　槐門子車をとめておるべし　又へまてつかねへいとこと
おるれば　おとにのるまへにいとおかくられ中二段活あるあら
しにのるこてなりにおるに世にあらんに古今集序に
の集秋部ある名をめてをれるはうそれ哥を引来てあやし
き細注をものせ〜ついさかもれてつひにはられ秋部にいろう
ても折有をれるはうそをもおまてるもうそといふことに解〜
る註さへにのるもとに氏おるべしといふこともの活きをつまひらか
にせさる故にものそたにあり折るに下るともうおちうふと
とをおりても折るも四段の活き下るべし中二段の活きかるとと

をつまひらかにふせにもさやうれおもひ誤をはきよくもの
にこてにのるはしらかつらひとにもにのるもことにもの活きのすちくにの
るへきありさるを詞の活用とりいふことをよくせぬにきる是にてもおもひあ
たるさるこのやうにいひるにに人のおかは世に安やるもうへにのるもいとなさ
まへきひら
意えにそ

古活　ちうちるく　こうさにる

懲
こるくといふ詞も古今集にこうぬ心を人にもちあん又こうにまにな
に見えにに如くすへて羅行中二段に活く同あれも将令懲をこう
せんといふ信くにうせよとおかにるもうよといふへく躰言へつく
をうもこるべ何とやうにいふへ〜又被懲もうらるべといふへき
なうさうをうにられもさらんこうるくなといふめるに皆誤あり

たゝし漢字まじりてゝみるに樵と懲とはこゝろとり文〜そいふ時のうゑ詞まはゝけてよまんもいと〜うゝねとゝの舊と経と隣とのゝけやたゝうゝぬ詞なれていまゝ〜きれとの人たよくせんたあやまりぬ佐〜ゝれ後拾遺ようゝれ山こえんるこそかこう〜めおらんかけきのゝんたゝろうなんとゝるもとゝ古懲たこゝろとはいあへゝゝゆる也思ひまうゝある事あれ続後拾遺ようれかゝとゝうゝさゝてゝろをみやゐ木のこゝろ。ゝゝも斧れおとつゝくゝうおゝゝそえゝゝるおゝとは樵りを懲。ようけたるなゝゝやゝてすゝと受て懲りを手とせるか

おそ〜ゝ

常ゑ羅行下二段ゑおそん。おそゝ〜。活〜語ふゝ〜は四段の活きたたそゝ。おそらんとやうゝもいひ〜例すてゑ八ちまゝにみえゝゝ但〜中むゝしのとゝ〜ゝさ活うせるゝゝあゝ〜ゝ古今序ゑ人の耳ゑおそゝ。土佐日記ゑ海賊のおそゝ。あゝ後拾遺しちゝのおそゝ。たあ〜しとをゝきゝ〜見えゝゝ活用の事ゑ意きめ人たゝるゝゝ紀処をむつゝしけよいふものゝて古今序ゝおそゝゝをたゝたおそゝ〜きの約りゝ〜例のみゝゝゝ延約をもてとうんとゝるゝゝおゝゝも少ゝ〜ゝたそゝゝ〜おそゝちゝき〜いふたゝ友鏡才二段の図ゑゝゝはゝく詞の連躰言おそゝ〜いふたゝ友鏡才四十六段の図ゑあゝたゝゝく詞の連用言ゑていたく異なゝゝとのをや、おそゝおそゝたゝ鈴木朗の言語四種命ゝいたゝゝる作用の言おそゝ〜きたゝ形状言ゑて詞のおもゝきまゝようゝ〜ゝたゝさゝは人のみゝゑ恐〜きゝいひてたゝさゝゝゝゝゝ〜ゝ活おのつゝゝもゝきくゝらゝゝ〜ゝ活

さゝ活　霧を用言にいへる例

霞

うはみたつねゝ躰言ゝも用ゝもいふなれゝきりゝた躰言ゝのみいひて用言なりと覚しきをちゝ見當らざれゝもゝたれも用言ゝいへりしなり字鏡日部ゝ曀壇の注ゝ陰而ゝゝ日光也太奈久毛礼利ゝゝ久毛利天風吹ゝ見えゝるゝゝ又土下ゝゝ壇を注ゝて曀字同陰也久毛利天支利大豆ゝみやさて万葉一十七丁玉手次畝火之山乃ゝゝ春草之茂生有霞立春日之霧流或ゝ霞立春日香霧流夏草香繁成双留百磯城之大宮處見者悲毛ゝの哥春日之霧流仙覚本ゝハルヒノキレルとよめれゝ細字ゝせる或ゝの香字ゝりゝみれゝ之字もカゝゝてゝる日ゝきれるゝよむへゝらゝくゝ霧流ゝ用言なるゝと見え同二八秋之田穂上爾霧相朝霞何時邊乃方二又紫式部日記ゝ見我恋將息ゝ見田霧相ゝきゝをゝ乃伝ゝふなゝ

出せゝかのうちきりたる朝のつゆもまゝおちぬゝゝ同人家集ゝゝみれゝ日記の此処を哥のはゝうきゝゝけるやうゝゝのきりをうしきかゝゝあゝひひ聚ゝてゝ意を得へゝといへる又同人家集ゝゝ志のゝ

名の空きりゝゝいつしゝと秋のゝゝきに世ゝなりゝゝゝ桃冊子ゝ朝あゝけれいみしゝきりゝゝちたる和泉式部日記ゝきりゝたるそゝこれらより猶おゝて考ふるに万葉古今おゝに天きる雪のあゝいるきゝるもとゝおなゝ事ゝて秋のきりゝゝゝられる限らゝすへて空のうちきぶといふ詞のあるゝそそれを躰言ゝいひかせるゝ今れたゝ秋の霧れこゝにあれるなゝんちれゝ古哥万十三丁ゝゝれる山のきりゝまゝへる嶌もとよあるも何ゝおく大空のうちきれる城いるゝに

こそあゝめさてきりをのそてきゝひゝもきゝしゝもいひきるをきゝゝゝるゝそゝりゝる又大空おゝなゝてももいへるけゝ万葉ゝいゝおくゝそはみおきりを用ゝふをのへゝ見れゝへはへてゝれむきるゝ其別ゝいゝ躰ゝいふゝゝひゝよく似ゝり

ひゝる

聖りをたゝ躰の語と覚えゝまられも用ゐもいへり源氏若紫にふる
きいもおれ中るそひゝり。入みるりるとゐるひゝりてふゝた例の躰
語とのみおもをられとゝくゐちもひえるゝ心ゝ。いるゝ用らし
いへるなるへゝ和語灯録一七二世を背ゝ侍人おそるゝ心ゝ。て名
聞もゐりて云云五巻十七丁にのせる念仏問答集にひゝり。て申されす
をつまゝ儲て申へし妻をまうけて申ゐれたを聖り。て申へしとゐ
るゝ如きえて。ゝうけゝられをうつなゝ用らしたるなり上の条まい
へる霧（きり）てゝいへる聖りゝくる類例おおふるき詞ふる記文ともは
られられゝゝ上に引るゝゝ紫の巻なるむゝ。入とあるゝみの文
ゝゝゝもやみ云云あまゝゝひおゝり。ゐるゝけれを云云ゝにおゝり。

て云云とあるおゝり。ゐゝも疲を用ゐいへるなり尚いをゝ儒を霊異
記にさゝりゝゝとゝあるなゝをゝゝさゝ（賢知）ゐる。ゝいへる活き語のあるゝ
こそそをたゝ躰言とのみ思ふをいをゐるひゝる。といふことをを志
らをたゝひゝりゝ躰言のみおわえたるゝ司るへし尚そゝゝれ類例活語雑話に出せり

みそゝ

（夷）
みそれも常に躰にのみいへと六百番哥合に家隆のかきくりゝ
そゝ。空やちえそめてこゐりもはてぬ志ゐれなゝんとゝ給
ひゝ如くも用言なり志ゐれ志ゐれの類皆同く用言を躰言に
いへるなれをあゝ例なりゝ覚ゐをいゝゝをゝくゐわり同く
里の小物屋千頴ゝ考へいひゝをゝへあひおきてちてのち何れゝ考

ある字鏡に霖志久礼又三曽礼と見えるあるは皆躰にせるかこと
て注せるあれとも用言あることその倍のさゐおのつゝふと明々
はつれ
たつれのいまゝきえのこるうもとよめるはつれをも何らしの漫
録にいむつらしうときてれたうゝぽたつれぽのきと同といへり今
おもふにあつれのまことおあゝといへるえいうんいまゝ考へ
定めねたうへあひかこゝれとたつれのれこおあゝといへるをけ
こたうる事にてそやたつるゝと活くれぽこれもはゝたつるゝ用くれぽ
なう此若狭にてうまてたつれあまれゝ通ていふ用倍なれ
ていとくきこゑたつれたつゝ躰言よみおもた人人を上のを

ちをちこいへる霧聖霊なゝゝ考つたに信ゝさてこれこつきて考
また万十八天雲のよそこのうれきゝこうはつれもふうさむ
ゝ此よそゝゝるかこは霜のふうはつゝをよあるにてはつれふ
こ用こう用へつゝるこそあこん又同巻六二に寄雪こゝるにたゝた
に薄太礼ふりおをひはたもつたれんといへるきゝそおもかも
こあほかこそたつれの雨をたつゝあたれゝいひみそれの雪を
こゝこみそれこいへるこ同ゝ例あるへゝ又同巻六十よ拔さむみあさ
こをのけていこ又またれも薄大良爾みゐきふりたゝこゝる
なこそ比衣をひやこいへるこゝあこひこて女声男声のうたうさこ又
た保杼呂こもいるこそけこをたつたつたこの如くこゝ通音そそ

ちるへしかこうくにはこれも本羅行下二段の用言なる事うつかし

のり　のに　なに　ぬに　ぬね

似字に當りてのらんのるのれと活く語にうつるとおもしろくて

備中々名ちうのりといへるに近似の二字をうく事和名抄に見え又

崇神紀に似字をノラスとよめるものを敬ひ詞にていへるなるへ

しとおもはるるまは漢籍の似字をそノレリと訓むこと拠のつるそす

と関由　此のるのるも羅行の音にてらりるれと活きのも奈行の才五音なるをそ

の日行の音通してこなるをうつはやうてその奈行にて一段の活と云る

をみるこうに居るといふ云の活きも羅行四段のうてそのぎを和行の才五音なる

をそのの日行の音通してみるとるるときうはやうてその和行にて一段の活といふ言な

るとそのさゐ全く日しうりるう又奈行才二音にて一段の活きなるるの音同行

才五音に轉してのとなるそれる又佐行に活きてたのさんのるのぜと四段の活き

とある様その例外にもやと考ふれそれ波行才二音にて一段の活といもるる干といふ

記の同行才五音にうつりてほとるるる佐行に活きてたほさんかるたせと四段

の活きとなるとまとくおる

しさゐあるうく考ふへし　さて同しく似字につくる詞になれるものに

ともいふありそれは佐行四段の活き又右にいへるのるも羅行四段の活

き又つれにつうふあるといふ詞も奈行一段の活きせちまた奈羅

三行にて三つに活きにうつるといふへきにられをもにへてかるのと活

くせあるといへるもいとくにうつるき説ともあるうし　干々比不富と活く

それもおもしくにうつるきこるもなる干字にあるる活き言も波行の一段

ともへる説のある

あるとは佐行四段なるこの二あるうとそいふへき乾をぬくいへることもいるもたく通

音なるのみせ活きくいふもの

るはあるにはよく考ふるし

けが

落窪物語に只今に大政大臣の屋もけるとも此殿の牛うひに手かゐれ

てんや　此けるけがもせ行和行にこえくとくと活く語のあるそれつ

まりてけといふる所こゝろみのおもの処こいへゝしう如〳〵さて
まゝおくにくゝるゝ撰〳〵て淘ける条をもえこしと全く同〳〵
意の詞とも関ゆれ〳〵言の活きをいへすあれも羅行四段の活きあり
されも蹴蹶をゝの字ゝ付ゝる詞むゝしよう也行下二段ゝ活くゝと
羅行四段ゝ活くゝ〳〵和行下二段ゝ活くゝとの三つありてきてゝいさ
うつゝ其意をくもあゝなる也たゝしけるといふ詞も本いゝふゝく
をおゝうしをゝれゝをゝてといふゝうつきりてもけてとありそれ
ゝもゝふゝうつりてけりてゝいふやゝうゝあゝつひゝけんけ。
ける。けれ〳〵活く語〳〵おゝもてきめゝるも仮〳〵そゝゝれ
へゝ〳〵いふ詞なゝゝゝゝは神武記ホ斐恵泥〳〵ある詞ゝてそ
をひをてゝいふゝくまりてもへてゝ陵ゝるやゝうゝあゝぬゝるよう

又へきてゝいふ事ゝもあゝつひゝゝへ学んへきへくへけゝ活
く言ゝもあゝゝるゝんゝ思ゝをゝをゝなゝゝたゝゝゝやい
ふへゝゝん

まやゝゝ　家み

中務集におもふとちきゝゝみてをれも梅花心ゝくゝや深く見ゆゝ
んゝ見え宇津保吹上ゝ春をゝうゝゝゝをゝれつゝ万代を君ゝゝま
ゝゝみも物もおもも〳〵とあるゝこれゝも用言いへる也ホ言今も唯
躰言ゝのみいゝなれゝゝも〳〵和行も用言なゝしゝ又も冠居の文字よ
り出たる詞ゝてゝとやも躰ゝのみいひゝをまれゝくゝは用ゝも
つゝひゝゝものゝそはちゝゝふもちゝれ称ゝむゝし人の用言そし

て尋ねもよめる証も右の二つて明せ　これつきて又ふつてある説ニ因居の字ニかくもるましき詞なるニあやまりて因居の字なとつめるうるをさへ行やまれるなりといひて或たま集のうつかあるうるも君とまりくもの詞そとくもみなるろしとしる詞なりとも右のさゐを案ひるふ因居てもをれたといふるを重言になりていくとそあるをまれよく考へしある人問中務集の思ふとちぇの哥居

なくま集ひて居れは纏ひて居れたといふすてみとうけ　るも後人の誤ありともいたれぬ傷きたちいちれ　荅古今集ニ野

へ近く家居居をれも當れなくなる声も朝ありくきくとよあるあるも居といふ事重きるニ非にや　古今の哥家みぜれもく一本まあれとなかをれもとうるう

たるうし　尚ものうはか吹上巻ニ君ままぬはあといへるニつもせ考

ふへへ　なほいもく假字の必みあるこてくも神乐哥ニさうきもるをうくもみ

てもるへ　ある書ニ是を滿登比世利介流とへて万止爲世利計留と古本ニろく爲字うけるに

のせうるも何ものられるうやいくもあつうあへ　さて第二音ニてみくあるの

みなれも一段の活きう中二段のうく流きもへきやうなれと一段のみるへきも家みといふ詞られと同へききと関ある找万葉十二ニ

里近く家や居るへきえとと見えるうて中二段の活うはあ次

とちられうう貫之集ニも山風ニうを尋てや梅花白へるわくに家

みそめけ雲といへるあくをみるニ家みきくく居なくみれ用言ま

るこく箸しられ纏ひれ説を誣ひんとていさうふけの古哥れまりを

も謬ありなくも云ありて紫語の用きれくニ心ろぬくくせ

用字ニあくこる詞

をちふくいふ詞の活きさぬ又そのうるれ事世の人さまくふ

ちくめこくを古事記傳十七巻ニ原仲正の哥を引証くての明

瞭出てよう誰もさそくちられるなるへし　俊頼朝臣の哥ニもふふようもられをとちひのまに鏡

うれ〜きうけおうつしてそみるに
ゐれも記傳の考いとく信従すへしたゞ〜閑居友ふつゝもちあるこ
となうれともいまゝめむまれと為る如くうけ吉水僧正の比をお
れを和行一段の活の格ゝつゝ〜あうんとうつもおもひすて猶考
ふれも尚ふるくふうもあう活うせるゝめ〜けうき蜻蛉日記ゝ
夢をも仏をもとちみるへ〜やもちみるまゝ〜やとあるをみるゝ
へしといふ辞き〜ゝふてをきへぶ文〜ようかれ法を必
一段の活き言なる例ありうくておもへも夕霧巻ゝ人の侍名を
よさゝゐゝいひなほに人をうゝれもの也そあゝ心清うおわれと
もあうゆちみる人をすくおくこそけ〜めうろうつくしきや
うに閑えうよひるひて尚ありしまうんうそよう〜矣と

あるもゐ文字本より倶りうはけう〜てうれ夢をも仏をもとちみ
るへ〜やもちみるまゝ〜やと同例なりけりあれをそ此物語を数本
を見あをせて人ゝのとうくく校合にめるおもうてれうをれるをおを
ゝ閑えうるそもく此夕霧巻けるを閑居友なゝのをぬをゐゝ
あやまれるなうんともいへをいをれぬへけれをうけうふ日記ある
をいうくさいをん此理りゝく明むへし和語灯七丁病おもけれを
来を用みるう如〜ゝ見えうるおゝもうれうゝ考へ明むへし

率　ひきゐ

ひきゐを八ちまゝうを和行中二段の活ゝせれゝうれを活用抄ホ
を一段活といふへきつゝにうれを出〜古事記傳ゝはつねゝひき

みるとのみつゝへるやなかわよからんこれをみるみれといふ詞
をひきといふことをうちねいへるてゝみまいをゆる家みる田みる
かとゝ全く同じ〳〵なるんとおもはるれを也霊異記には率為
氏字鏡には井天とありすへて將字帥字率字かとにあることゝ
なたゝみるみるみれとうれ居字の意の活きと全くおなしきゆ
を活くなるんと思はるゝは物語文かとにみて奉るなといへる
これあゝそれをひきといふことのうきありてた將して中二段の
活とれるをやとおもはるゝあるゝぬをうれ見
るた一段の活おれとうしろといひうゝといふことをそへてひと
つゝてた中二段を轉じてうしろむるうしろむるとある例もいれ

たなり八ちまゝえろうやをうかる意をゝひうてそひき率みを中二
段の活とは定たるもゆだなしん又うれるといふことをうしろ
らゝをそへてゝる心みるといふ詞みるといふ詞を家といふことを
うちゆたる家みるかとにたなかたゝ一段の活をてあるみくひの例も
いれたひきみも一段の活なるへしといふもことわりいるるゆあら
ばや活用抄かとにはさるゝこゝろをらひをやあつゝんこれも友
鏡には才三十四段の図をうゝてまつ八ちまゝこゝ従ひおきつ
きゝ活用抄のりさゝも意ひうれてたうれ才四段といふものを
省きてもよりんとうつたおもふまゝにそのよゝいさゝらいひおき
れたゝしゝろみといふも八ちまゝこひろゝ狩衣なるうしろむる人おろ
らんとうをおとようみれを恨むるとおゝ〳〵活きをそけゝ麻行中二段のゝ

おもえられしうはは物語（上今本下二十四）こうしろみるもとも見えるをられも
写誤こうしたれ狭衣のそうへうてむそみのゐやまりといふへきさてもうしろ
みしいふも試み率ゐ。おしの如くたし二段の活きしいふへしされしこれ下二段も
活きて拾遺十六こうしろめていそうへうん山さくしあらぬ白を風に任せてなと
見えられも尚うつかのうしゐやまりうしあしんうしかくに一段の活に外の行の
そそれるうはゐへてそのもものきしに二段の活あると又非して中二段のこあれ
ると行りて五に分ちしうなんされも試もころむるといへるもうしふみしみを
しにやふるくうなきあしもゐしれひきうるといふも訓読に見えること
いちしたに一段の活そそ云へきう　然也とも八ちましこ引る崇神紀急
居此曰莵岐手　これ日巻に乾を賦とよむへく注せる或れ身おむといひ神
たきすせ　をうむといふ類おらんともおももるれもこれも尚さきりう
たえちしえあへゐ人うくあれをたしてよ

くうゐ

蹴字蹶字に行ゐ所詞は偶穢も和行下二段の活あり然るに也行
下二段活と覚しき古由といふ詞も蹴字の意なるうあるにつきて
うく假字も異あるも和名抄れころもやく誤にしるやをいへる
もさるこしそけにおをつうおきこに覚えしよく思
へも俗言にこるといふおして考ふるもにへて和行下二
段に活きても物をおうにる意は詞をも物のおのつうおうに
いふをうも羅行四段活につていふ例おほし何をすうるい
ふをもおのつうおうにうても何このするといひ木艸をく
るも木艸のおのつうう然るかこういへるいふ如くこの
くもうれくもはらくうにいへるも何うしは神のおうおふ
るそれをそその庭土のこうそのおうるをいもんこもくこ

る。といふへくぞおもはるゝなれは此詞の本より和行の活なるへきことはなきにもあらさへりはなるへし然るに万利古由の古由はその意やゝ異に聞ゆれは古由と俱織。とはもとより同しからさるにや信し又思ふにかの古由の活きは古江を源氏根合にまうけ。なと行ぞなせむひといひあれは同し活きとも聞ゆる距なつねにけ。つめといふさてられ古言にくゑけちらんといへることをは今俗つねにけ。ちらうれといひ古人の名に當麻蹶速とききゆるかりかくけ。といへる処まてもけちらんのけ。もまうけれけも大なさおなし意同し言と聞ゆるによりてこられはその本はるへしてみるにくゑ。くう。とこえ。とゑ。とは同し詞と思はれもほるなりうるきは和行の活と也行の活との別ありてかなも異なるものゆゑはかいふ不審はあれあるへきなれと也然きとも右に辨へたる如くなれは猶蹴散のくゑ。も和行の用言蹴鞠のこえ。も也行の用言にてをのつから異なるなるを知へし

さてつゐでにいふ正濫鈔に中下二段の条に字音のけ「くゑ」とはゐのけ「くゑ」を互に例しいへるはおろそかなる見やうなれとよくおもへはいてこそのなれる人の説にて味ひありたゞし字音に華化なとくゑ「そくゑとうけるは誤なるは本よりの事にて又そなたにいへる物をけるをはいましへゑくゑるといひてゑゑといへるもまろしくなるは俗言なりこそけるをさむひましへをけ「くゑ」くうるといひてゑゑといふへきをあやまりなれとよく味ふへし

山口栞中巻終